

エンゲージメントとエネルギーを 自律マネジメントするオフィス環境デザイン

株式会社日本設計 高橋好斗

- ・カーボンニュートラル社会の実現にはテナントオフィスビルの利用価値を高める必要
- ・Activity Based Working (ABW) などの多様な環境において、自己選択に基づくウェルビーイングな選択行動を促すオフィスデザインを提案
- ・オフィス=個人や組織のつながりを創出する場
- ・アンケート調査によって他社との協働作業時間が多い人は、エンゲージメントの主観評価も高い

はじめに

カーボンニュートラル社会の実現に向け、オフィスビルは、環境性能の高機能化だけのエネルギー削減に限界があり、オフィス運用段階での一歩踏み込んだ最適化が求められる。また、コロナ禍を契機にオフィスそのものの価値が再考され、オフィスには人的資本の場としてActivity Based Working (ABW) などの多様な環境が求められている。これらを踏まえ、オフィス環境として多様な「環境の個性」をデザインし、その多様性をデータ活用でマネジメントする取り組みを導入したオフィスにおいて、行動特性と主観評価の関係性について報告する。

環境デザインアプローチ

温度や照度など環境要素を意図的に操作し、偏差を持たせることでオフィス環境の個性とする「エッジデザイン」。エッジデザインでつくられた多様な環境を適切に活用するための「ナッジデザイン」。この2つの手法をオフィス環境デザインに取り入れた。

データドリブンなオフィスマネジメント

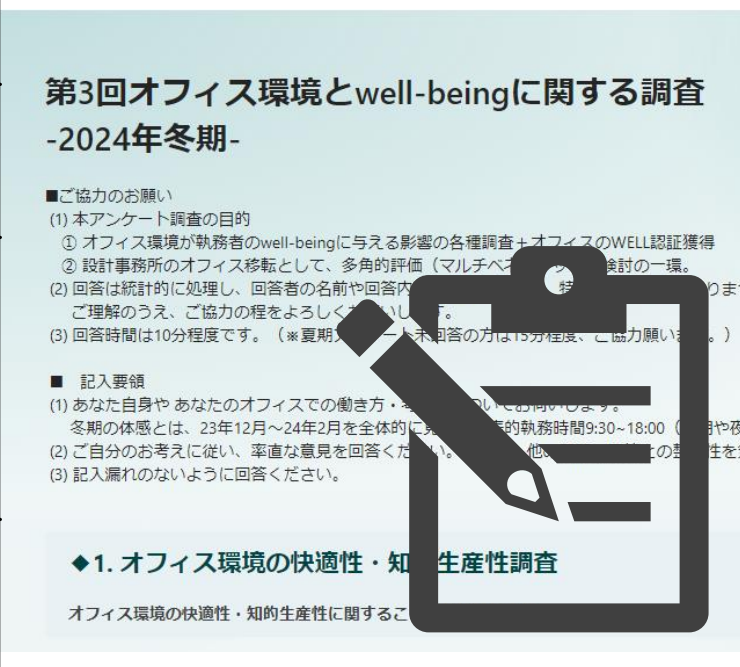
ナッジデザインでは、様々なデータを収集し、オフィスの環境情報、スマホ測位システムによるワーカー位置情報(約1000名)、アンケート調査による個人属性情報(約400名)を収集、分析し、最適運用に導くマネジメントシステムを構築した。

アンケートと行動分析調査結果

アンケートによる主観調査と詳細行動分析から、他者との協働作業時間が50%を超える執務者群はそうでない執務者群と比較して、ワーク・エンゲージメント(UWES)とWorkplace PERMA Profilerの主観評価が有意に高いことを示した。これらは仕事をする上での前向きな気持ちや他者との良好な関係を評価する指標であり、個人や組織のつながりの創出を促すオフィス計画の重要性が示された。働く場所の意識について「色々な場所を使いたい」と回答した人は室内環境が知的生産性に与える影響をより強く認識していた。このことから多様な環境づくりを知的生産性向上のために必要なデザイン要素として考える必要がある。

アンケートによる主観調査概要

| | |
|---------|---|
| 調査期間 | 2023年9月~11月、2024年2月~3月 |
| 対象者 | 本社オフィスに勤務する社員(800名程度) |
| アンケート内容 | オフィス環境評価 + 知的生産性内的モチベーション(PERMA(幸福度)、UWES(エンゲージメント)、TIPI-J(性格)) |
| 有効回答数 | 432名(上記2期間合計、回答者の重複無し) |

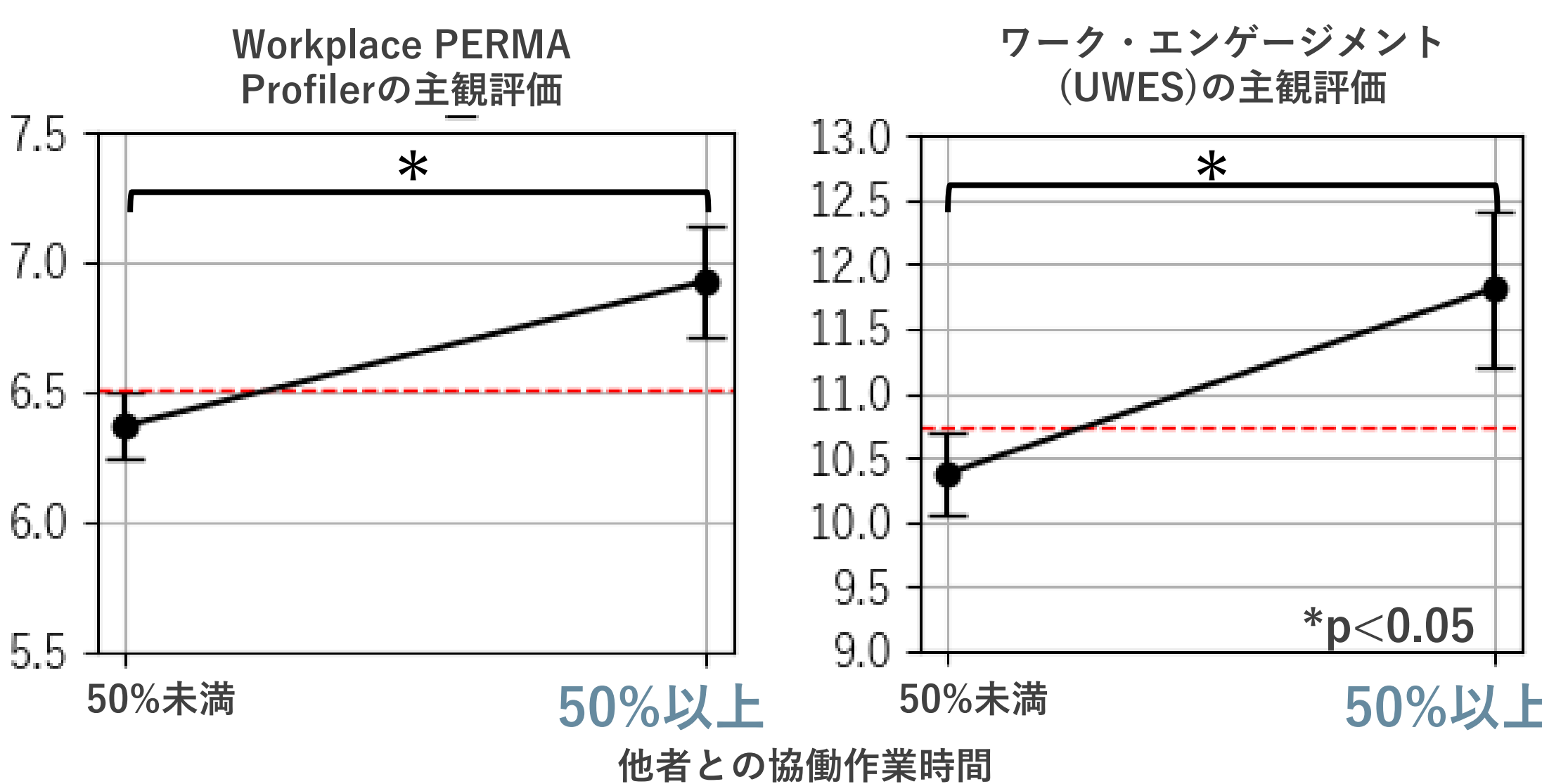


スマートフォンを用いた詳細行動調査概要

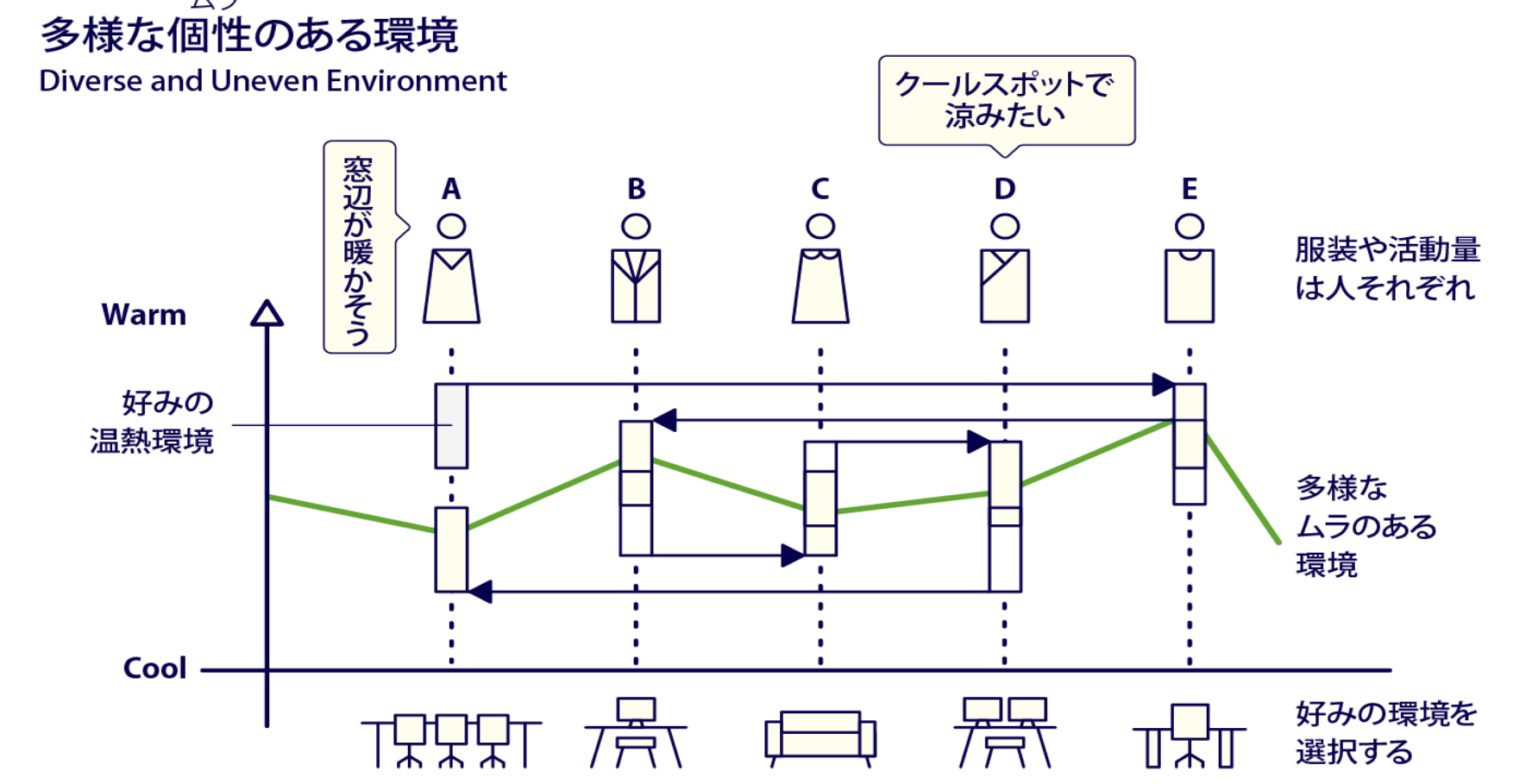
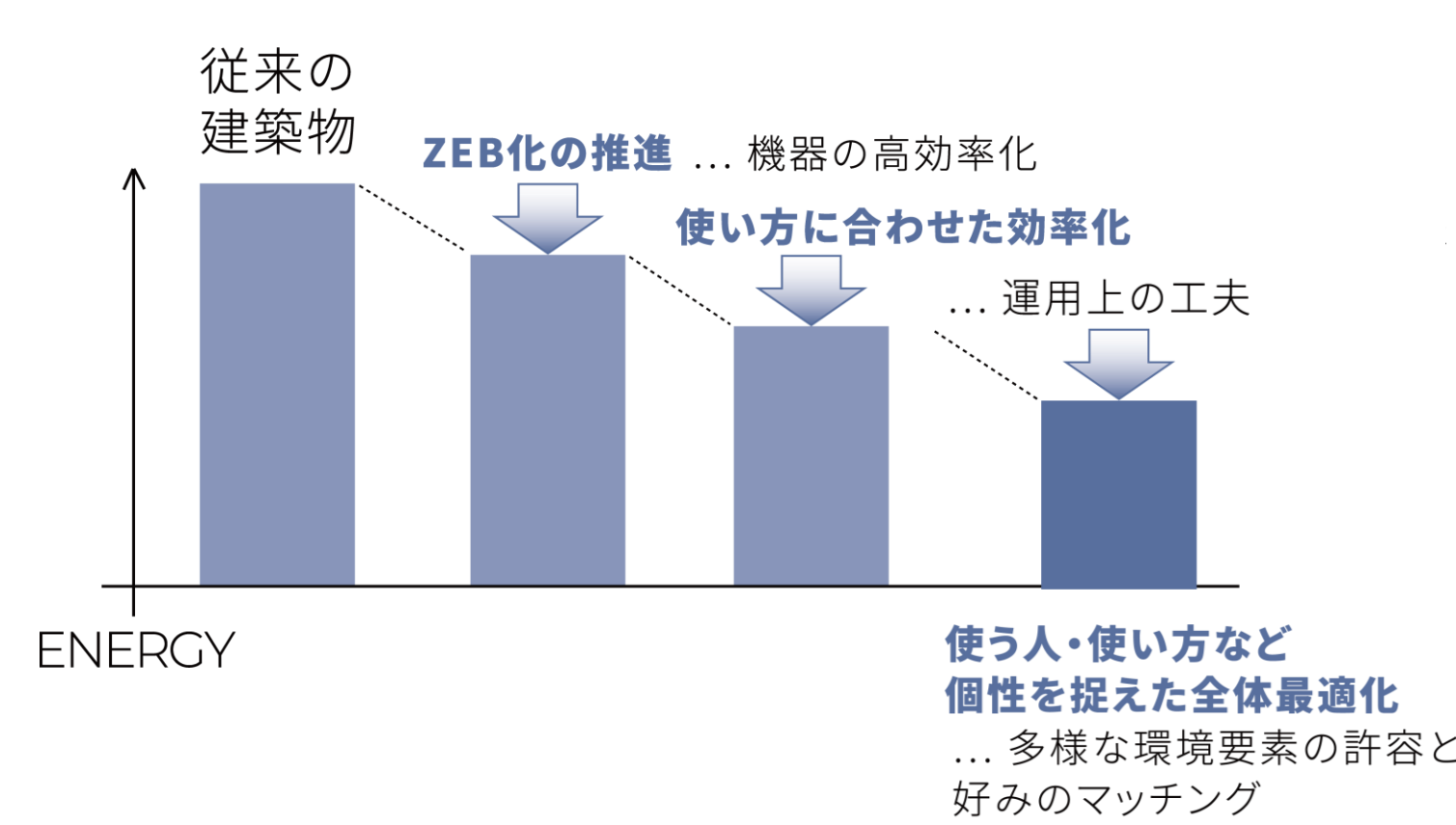
| | |
|---------|--------------------------|
| 調査期間 | 2024年4月8日~4月12日の5日間 |
| 対象者 | 本社オフィスに普段勤務する設計業務を行う101名 |
| アンケート内容 | 1時間ごとの行動内容、満足度、偶然の出来事の有無 |
| 有効回答数 | 79名 |



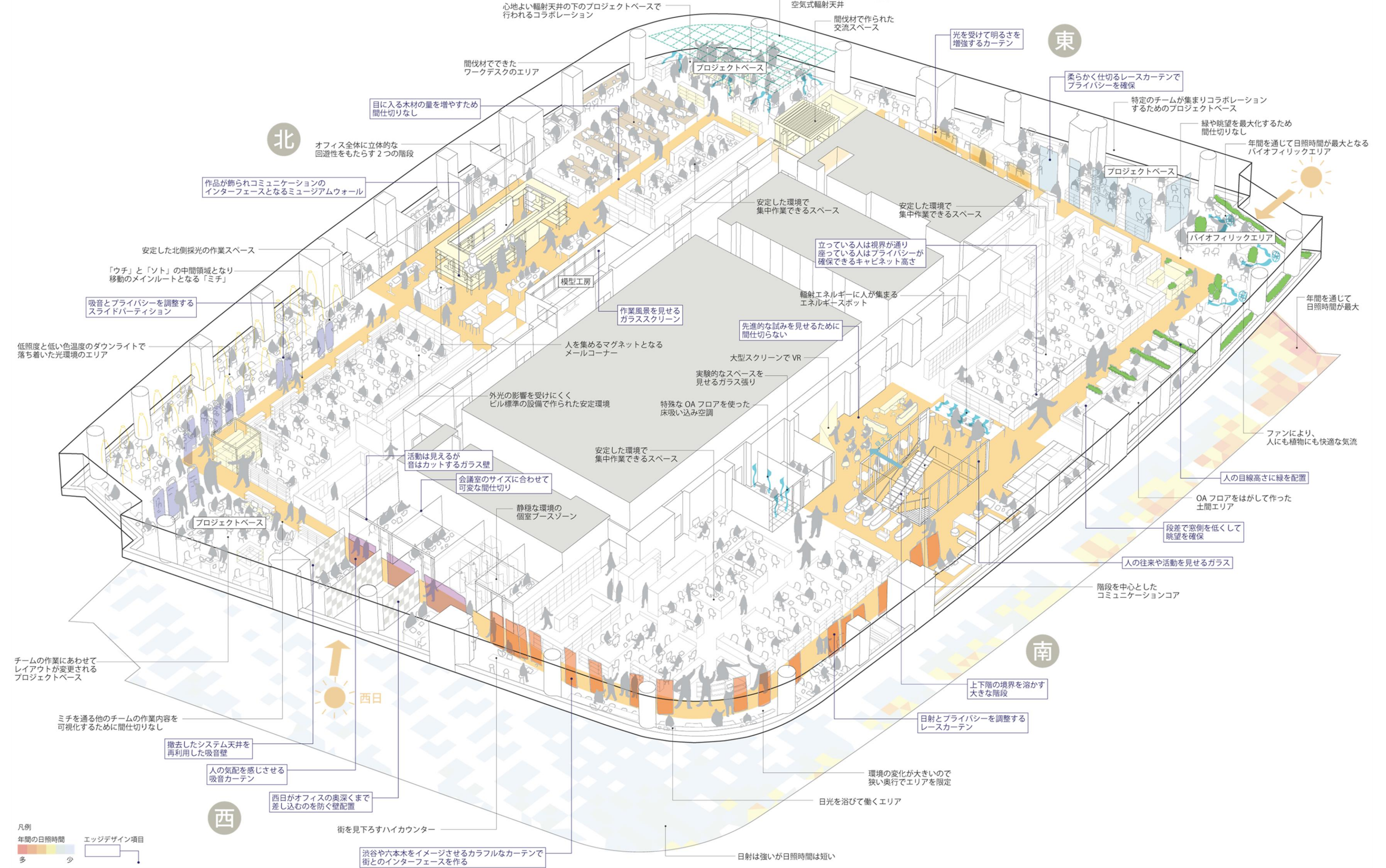
エンゲージメントに関する主観申告スコアと他者との協働作業時間の関係



カーボンニュートラル社会の実現に向けたストックオフィスビルの価値創出



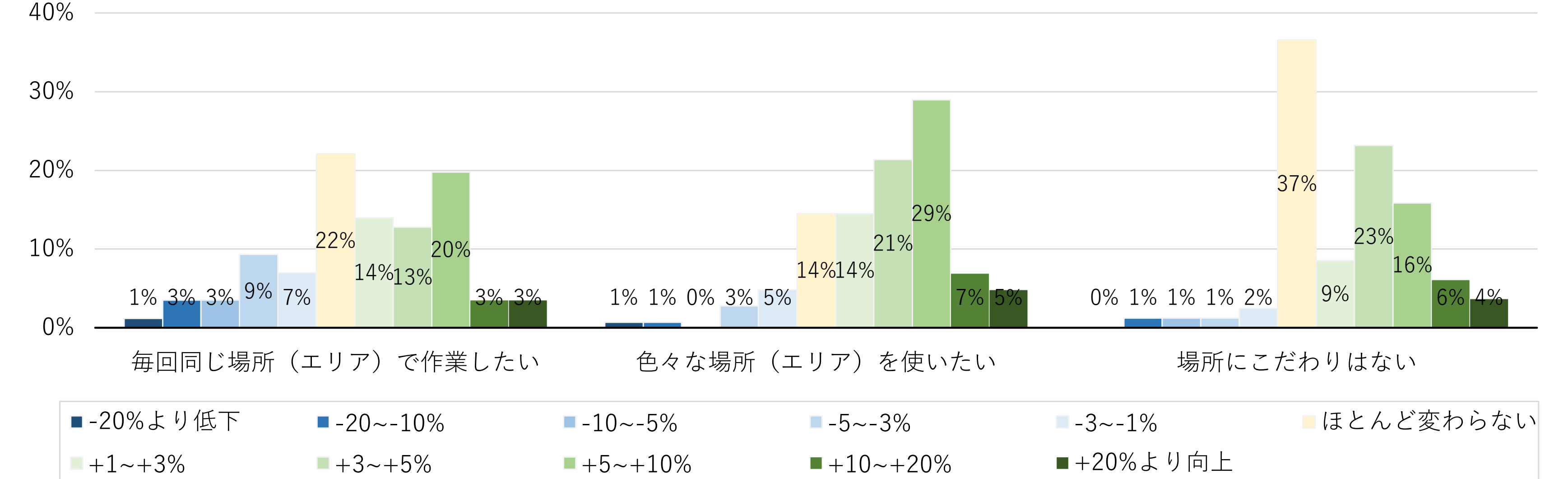
自己選択に基づくウェルビーイングな選択行動を促すオフィスデザイン



多様なオフィス環境を感じるエッジデザイン



働く場所の意識と「Q.室内環境が知的生産性の低下ないしは向上した程度」の関係



働く場所の意識と室内環境の満足度の関係

